

## 外国語習得における達成動機づけの低い子どもの特性と行動

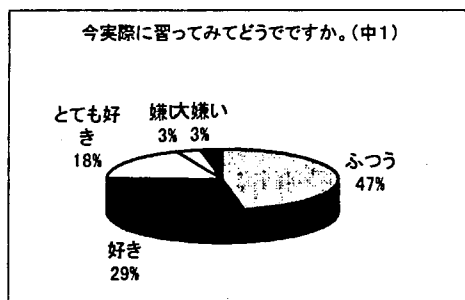
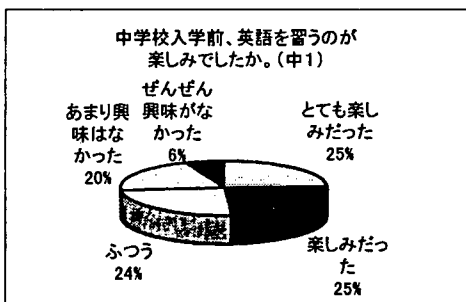
中西美佳

私は、大学4年生で経験した教育実習で、いかに楽しく英語に親しむかという課題を残した。英語の授業は、あてられて間違ったらいけない・正しい答えを言わなければいけないと、過度に構えてしまったり、必要以上の緊張感を与えてしまったりするものではなく、楽しんで、そしてリラックスして受けるものだと思うからだ。コミュニケーションをする上で、一番大切な事は、間違ってもいいから、自分の意見を積極的に伝えようとする姿勢だと思う。

学年が上がるにつれ、英語に興味・関心をもつ、もたないがはっきりして行くことは事実である。英語にだんだんやる気がなくなっていく原因に、知的能力の差、学習に対する生活習慣のなさ、関心の方向性が考えられる。まず、第一の知的能力の差についてであるが、よく、子どもの中に「私バカだから、どうせできない。」と発言する子がいる。知的能力の差は、先天的な部分が含まれるので、すべての子どもがやった内容を理解できるとは考えにくい。どうしてもペースについていけず、理解できないままにいる子は知る喜びを感じられず、やる気がおこらなくなる。2つ目の学習に対する生活習慣のない子は、家に帰ってもすぐにテレビゲームに夢中になったり、遊びにでかけてしまったりする。知的能力はあるが、机に向かって座るという習慣がないのだ。3つ目の興味・関心の方向性とは、興味・関心が限定されている子たちである。すべての子ども達が英語に興味・関心を抱くとは考えにくい。将来、野球選手になろうと思っている子は、朝から晩まで野球づくで、英語の必要性を感じない。他のことに一生懸命の子どもたちは、そのことだけで精一杯である。英語に対するやる気は低いのだ。この主な3つの原因の中で、教師が手助けでき、援助できることは、2つ目の原因、学習に対する生活習慣のない子である。そこで動機づけについて調べることにした。

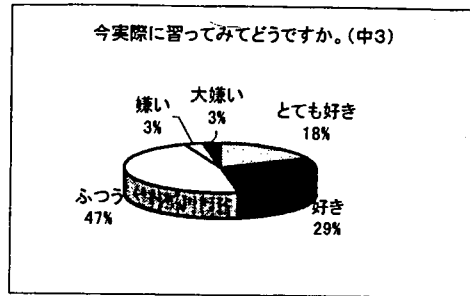
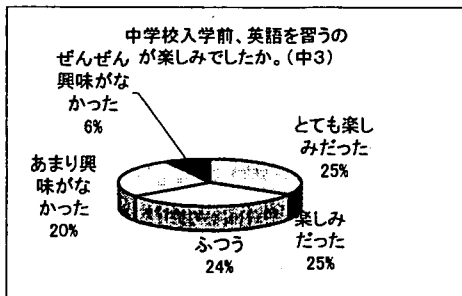
まず、中学校1年生に、以下の2つの質問をした。

- ① 中学校入学前、英語を習うことが楽しみでしたか。
- ② 今、実際に習ってみてどうですか。



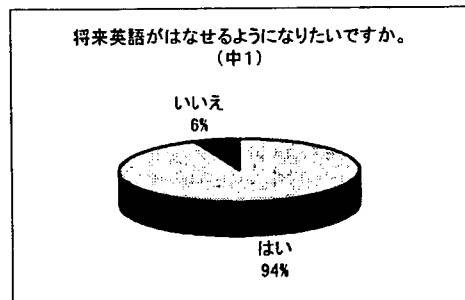
中学校入学前、約50%が英語を習うことを楽しみにしていて、約25%が興味はなかったと答えた。それに対し、現段階(2000.11)で英語に興味・関心があると答えた生徒が、44%、興味・関心はないと答えた生徒が、6%であった。さらに細かく分析すると、習う以前より今の方が興味・関心を抱き、良い方向へ変化している生徒が27%、好ましくない方向へ変化している生徒が24%であった。以前より興味を抱くようになったと答えている主な理由は、授業が楽しいからが最も多く、少数意見として、簡単だから、テストでよい点がとれるから、しゃべられるとかっこいいから、よく分かるようになってきたであった。以前より興味が無くなったと答えている主な理由としては、単語が覚えにくい、テストでいい点数がとれない、とにかく難しいという意見が多かった。さらに彼らに、「どうしたら興味・関心をもつようになりますか。」と聞いたところ、たぶん興味をいただくことはない、宿題がなくなったらという意見であった。

同じ質問を中学校3年生にもしてみた。①入学前、英語を習うことを楽しみにしていたと答えた生徒は44%で、あまり興味はなかったと答えた生徒が34%であった。②今、実際に習ってみてどうですかという質問には、25%が興味・関心をもっている、38%は興味・関心はもっていないと答えている。良い方向へ変化している生徒が19%、悪い方向へ変化している生徒が25%であった。以前より、興味を抱くようになった主な理由として、授業が楽しい、簡単だから、テストでよい点がとれるからであり、少数意見として、英語の響きがよい、勉強が楽しいであった。以前より興味が無くなった主な理由として、1年生と同じように、単語が覚えにくい、難しいという意見が多かったが、授業が面白くない、勉強自体が嫌いだと答えている生徒もいた。



1年生と3年生を比較すると、その学年の特質や担当教師などによって多少の違いがでてくるものと思われるが、3年で英語に興味・関心が薄れていく生徒が増えていることや英語に興味・関心をもち続ける生徒が減っていることが問題である。英語は習い始めの頃は、文章が短い、親しみやすい単語がでてくる、授業はゆっくり進む、ゲームや歌で楽しい授業が多いなど、学習というよりは楽しく英語に慣れしないうという要素が多かった。しかし、3年生にもなると、文章が長い、単語量が増える、授業のスピードが速いなどと、暗記力・思考力を必要とする学習として位置付けられていく。内容が難しくなるにつれ、英語離れが進んでいくことが分かった。

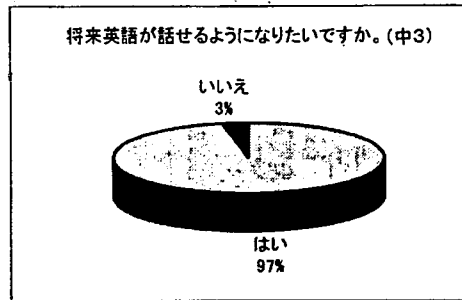
「将来英語が話せるようになりたいですか。」と質問したところ、中学1年生で94%が「はい」と答え、その主な理由は以下の表のとおりである。逆に「いいえ」と答えた生徒は6%で、理由として、必要ない、日本の中では必要ないをあげている。「どちらでもよい」と答えた生徒は20%で、外国へ行かない、国外では働かないからを主な理由としてあげた。



・英語関係の仕事につきたい。	・ツアーでなく一人で旅行ができる。
・外国にすみたい。	・就職に必要である。
・しゃべられるとカッコいい。	・今の時代、話せてあたりまえ。
・役立つと思う。	・外国に人々とコミュニケーションができる。
・外国へいきたい。	・いろんな人々と交流したい。

英語が話せるようになりたい理由 (中学1年生)

同じように中学3年生に質問したところ、97%が「はい」と答え、その主な理由としては以下の表に記した。反対に、「いいえ」と答えた生徒は3%で、外国に行きたくないからを理由にあげている。「どちらでもよい」と答えた生徒は20%で、日本に住んでいれば使うことはない、日本人だから、将来が未定だから、仕事にもよるを理由としてあげている。



・国際化していく世の中だから。	・外国の人々とコミュニケーションができる。
・海外旅行に行きたい。	・歌の歌詞や洋画を理解できる。
・話せるとかっこいい。	・就職に必要である。
・役に立つと思う。	・海外で暮らしたい。

英語が話せるようになりたい理由 (中学3年生)

このように、多くの生徒が英語を話せるようになりたいと思っているにもかかわらず、英語離れが進んでいる。学習内容が難しくなっていくことが原因の1つであるが、このときの子どもたちの内的変化はどうなっているのだろうか。そこで次のような調査をした。まず、4つの質問をした。

- ③問題を解いているときに、途中でうまくいかなくなると、その後の問題も解けなくなってしまう。
- ④やることが難しそうだと、うまくできないのではなかと気になって、ますますできなくなってしまう。
- ⑤やっているテストが自分にとって大事なことと思えば思うほど、うまくできなくなってしまう。
- ⑥間違っって笑われるのが嫌なので、あまり手を挙げない。

上の質問に、「とてもよくあてはまる」には4、「どちらかといえばあてはまる」には3、「どちらかといえばあてはまらない」には2、「全くあてはまらない」には1をつけてもらった。質問の内容から、この値が高い子どもは、「テスト不安などのように、テストや学習のとき、失敗を恐れるあまりに、学習に集中できなかつたり、学習場面から逃避しようとしたりする」(下山：

33) 傾向が強いと推測できる。

学年別で比較すると、学年が上がるごとにこの傾向が強くなっている。特に小学校から中学校にかけては、失敗回避を強く感じている。

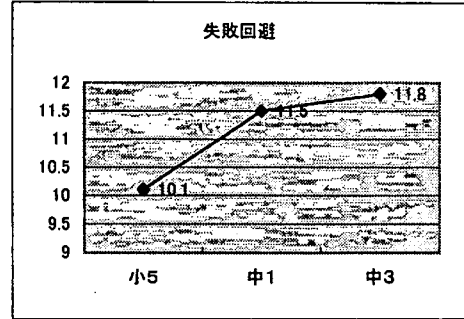
アメリカの心理学者アトキンソン (Atkinson, J, W) によると、ある課題に直面したとき、やる気や意欲は、特に外的

要因が関与しない場合は、個人内に内在する動機の強さとその課題の認知の仕方によって規定されるとしている。動機の変因としては、成功したいという動機と、失敗を恐れ、失敗を回避しようとする動機とがある。

達成動機の強い者は、成功を求めて課題達成に積極的であり、克服してやり遂げようとする傾向が強い。この動機は幼少期からの生活経験における達成経験・成功経験が満たされたり、さらに高められる経験を通して形成されたりするものである。

失敗回避傾向の強い者は、失敗を予測し、恐れるあまりに課題達成に消極的になり、回避しようとする傾向が強い。それゆえ課題への取り組みは自発的になされず、なんらかの強制や圧力が加えられて、嫌々するという形になりやすい。この動機は、幼少期からの失敗経験、特に、自己の有能さが規定されるような経験に由来する。

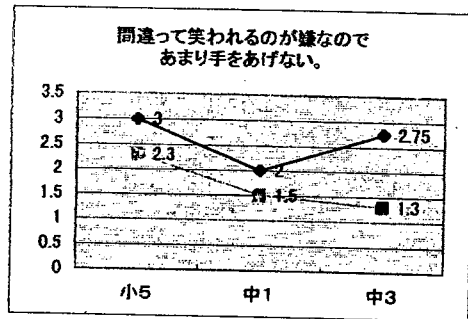
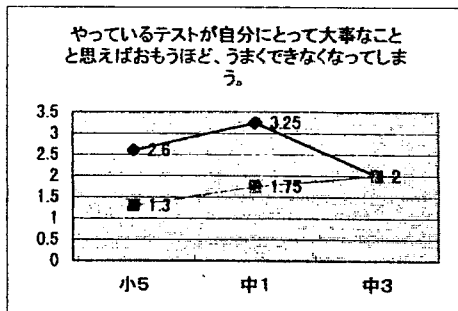
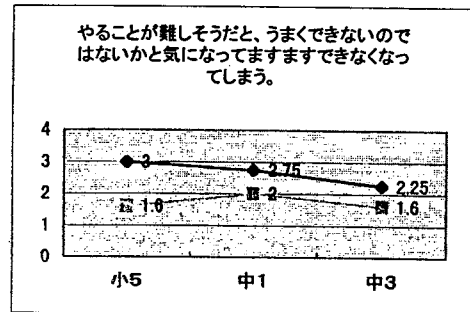
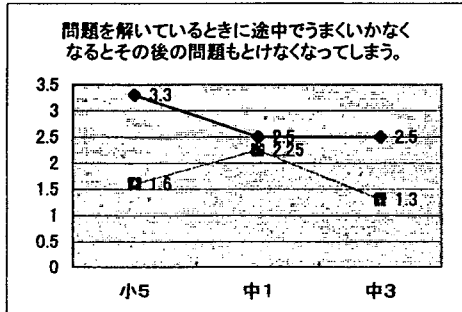
次に課題に対する認知の仕方として、達成の見込み（成功予測）と成功の魅力（成功したときの満足度）に対する認知の仕方がある。私たちは、課題が与えられたとき、自分の能力や過去の経験に基づいて、その課題に成功する、あるいは失敗する可能性を推量する。易しい問題に成功してもあまりうれしくないが、難しい問題で成功すれば満足度も大きい。成功動機がより強い者の達成傾向は成功確立が50%近くのところで最大になり、それ以外では弱められるとされる。また、失敗回避動機がより強い者における抑制傾向も、成功確立が50%近くの場合に最大になり、それ以外では弱められるとされる。つまり、やる気のある者では、あまりにも易しい、あるいはあまりにも難しすぎる問題ではなく、できるかできないか分からないような能力相応の問題が最もやる気を刺激するが、やる気のない者は、失敗を回避しようとして、当然できるような易しい問題か、できなくて当然である難しい問題の方がやりたくない気を少なくさせる。同様に、課題の選択や目標設定においても、やる気のある者は能力相応の課題や目標を選択したり、設定したりする傾向が強いのに対し、やる気の弱い者は、能力に比べて易しすぎるか難しすぎる課題を選んだり、低すぎるか高すぎる目標を設定する傾向が強い。以上から達成傾向 = (成功動機 - 失敗回避動機) × (成功の予測 × 成功の魅力) という式が成



り立つとしている。

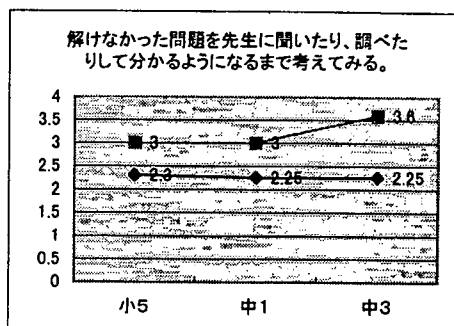
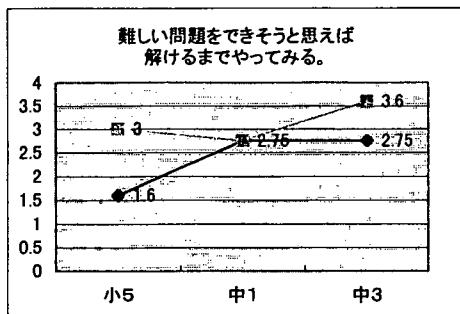
実験の続きとして、英語のテスト結果、授業に対する積極的な取り組みなどを考慮して、上位3～5名、下位3～5名を、小学校に関しては、いろいろな教科の結果、授業に対する積極性などを考慮して上位4名、下位4名を担当教師に選んでもらった。そして同じ質問をした。

いずれの質問にも、下位者の方が高い値を示した。下位者は失敗を恐れている傾向が強い。

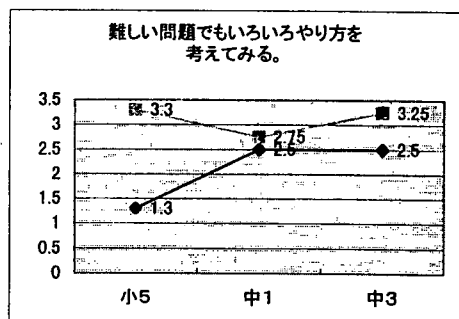


さらに、何かをやり遂げた・成功したという達成感が得られているのならば、その失敗回避を強く感じることはないと思われる。たとえ失敗したとしても、成功した経験があれば、またがんばろうという気になるはずである。失敗回避を強く感じる彼らには何が不足しているのだろうか。ねばり強く考えたり、自発的に学習したりすることが少なく、成功すること・達成することまで結びついていないのではないかと思います。以下の質問を試してみました。

- ⑦ 難しい問題をできそうと思えば、解けるまでやってみる。
- ⑧ 解けなかった問題を、先生に聞いてみたり、調べてみたりしてわかるようになるまで考える。
- ⑨ 難しい問題でもいろいろやり方を考えてみる。



いずれの質問も、上位者が下位者よりも高い値を示した。目標達成に努力したり、困難な問題に挑戦したり、目標が達成できるまでやりぬいたりするような傾向が下位者は低い。特に、自分でやってみて問題がわからなかったとき、さらに手段を考えてやってみる姿勢が低い。また、問題を最後までやり抜くことが少ない。

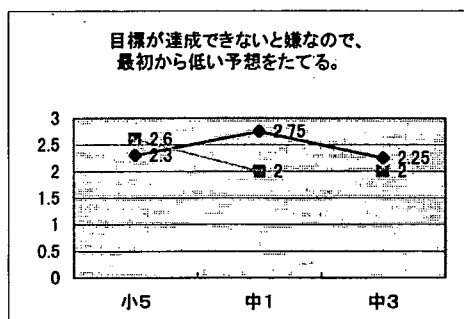


■ 上位者      ● 下位者

それでは、目標の設定の仕方や立て方が高すぎたり、低すぎたりするのではないだろうかと思い、以下の質問をした。

⑩ 目標が達成できないと嫌なので、最初から低い予想をする。

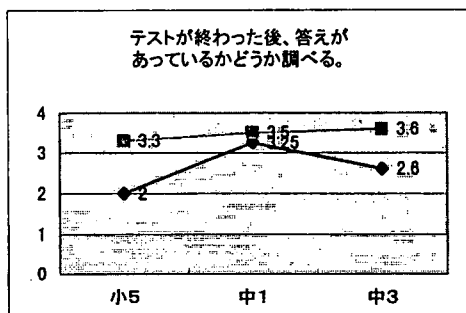
下位者は目標を低くたてがちである。自分の能力に対して、低すぎる目標を立てた場合、先ほども述べたが、簡単にできてしまうので、成功はするが、成功感はあまり強くない。成功感が一番強くなるのは、「がんばればできそう」というところに目標をたてることである。しかし、どの程度の目標が自分にとって、よいのかを見極めることは難しい。そのためには、まず自分がどのくらい問題に対して理解しているのか知るべきである。



今まで、同様に次の1つの質問を試してみた。

⑩テストが終わった後、答えがあっているかどうか調べる。

いずれの質問も下位者が上位者に比べ低い値を示した。自分の学力や成績などの学習場面における自分の力量を自分なりに評価する姿勢が低いのだ。それでは目標をたてにくい。自分の結果をしっかりと見つめ直すことで、失敗した原因を考えたり、目標の立て方が低すぎたのではないかと考えたりで



きる。これを繰り返していくうちに、だんだん目標の設定の仕方がうまくなったり、成功を味わう機会が増えてきたりすると考えられる。

以上のいろいろな調査結果から、失敗回避傾向の強い子どもは、目標の立て方がうまくなかったり、それに伴って物ごとをやり遂げたりすることが少なかったり、あれこれ手段を考えて最後までやり抜く姿勢が低かったりすることがわかった。また、失敗回避傾向の強い子どもは、小学校のころからその傾向があり、学習する習慣がないことがわかった。

成功した喜びの経験よりも、失敗したつらい経験の方が重く心に残っている子どもにとっては、課題をうまく成し遂げて成功しようとする気持ちより、失敗をしたくない、失敗をしたらどうしようという気持ちが強く意識される。

失敗回避傾向を弱めるために、指導者側からどのような働きかけをすべきであろうか。もちろん、今まで述べてきたように、自分の目標設定を成就感が得られるところにおくことで、だんだん成功感が得られるようになり、解ける喜びを感じていこう。そこから、やる気や意欲がでてくると思われる。そのように導いていくことが教師の役割でもある。さらに、今までみてきたように、失敗回避傾向の強い子どもは、情緒的にもとても不安定である。間違ったり、点数が悪かったりしたことで過去に、親や教師に非難や叱責を受けた経験を持ち、そのために、このような失敗は二度と、味わいたくないと思っている。

### (1) 情緒的な人間関係

情緒的な好ましい関係が築かれることは、子どもたちにとってとても大切だ。「よき人間関係のもとでは子どもは教師を信頼し、教師からの温かい励ましを受けて、適度に困難な課題に思いきって挑戦を試みる勇気がわくものである。子ども達がたとえ失敗しても、受け入れてやる姿勢が大切である。」(下山：85)

昔のような先生と教師という関係より、先生兼友達といった関係の方が子どもたちは、信頼しやすいのではないかと考えられる。教師が、子どもと同じ目線にたって話を聞いてやるのがとても大切だ。子どもを教師が育ててやるとい



った見方ではなく、共に成長していくといった見方が必要になっていくと思われる。

## (2) 失敗回避傾向を低減する教師の指導技術

「失敗回避傾向の強い子どもは、自分の能力が試され評価される場面からは遠ざかっていたい。それなのに、いきなり応答を求めるような指名を行うことは、過度の緊張を引き起こすことになる。あがった状態では、本来できる能力が十分発揮されずに失敗経験を積み重ねる結果となる。そのためいっそう失敗したくない気持ちが現れてくる。こうした関係を断ち切り、成功経験をつませるためには、失敗回避傾向の強い子どもに特に留意しなければならない。」(下山：86)

教育実習で授業を見学したとき、ある教師は「じゃあ、今日は15日だから15番の人から後ろ方向でどんどん答えていきなさい。」と言って指名をしていた。このように応答の順番が分かっていたり、順番を予知できたりする指名によってかなり、失敗回避傾向を弱めることができる。

## (3) フィードバック、評価方法

「子どもにとって課題の成否はとても気になる。うまくいったときは心地よい気分になるだろうし、自信もわいてくる。反対に、うまくいかなかった時には不快な気分になるであろうし、自信をなくしてしまうかもしれない。さらに、課題の成否についての他人の評価も気になる。ゆえに、教師は、子どもたちの学習活動への評価に注意を払うことが大切である。子どもの反応が正しかったり、うまくできていれば誉めてやったりする。うまくできなかつたときは、叱ったりけなしたりはせずに、今度はできるであろうと成功への可能性を意識させなければならない。」(下山：88)

最近、子どもたちを叱って育てるのではなく、誉めて育てる傾向がある。通知表の教師からのコメントもなるべく子どもたちの良い面を書くようになっていく。子どもたちは、教師の何気ない一言で傷ついたり、殻に閉じこもってしまったことがあるので、発言には留意しなければならない。

## (4) グループ指導

「グループでの学習は、不安を軽減し、学習の効果をあげるのに大いに役立つ。課題や目標達成の評価が個人ではなく、グループ全体になされるからだ。失敗回避傾向の強い子どもは、評価が自分に対する個人的な評価から離れるためのびのびと学習活動ができる。さらに、少数のグループであれば、自分の考えも述べやすい。グループ内のさまざまな考えと自分の考えとがぶつかり合い、自分の考えを深めていくとともに、討論や共同作業を通して、グループ内の人間関係も深められてゆく。失敗回避傾向の強い子どもにとっては、情緒的な結びつきを強めることにもなる。」(下山：89) 教育実習で、担当教師はなるべくグ

ループを組ませて、練習をさせたり発表をさせたりしていた。そうすると、子どもたちは、仲間に迷惑をかけてはいけないと、単語の読み方を調べだしたり、発音の仕方を友達に聞いたりしていた。いつ当てられるだろうか、この単語はどのように発音するのだろうか、不安を抱えながら授業を受身的に受けているよりも、実際にグループ活動することで、不安も解消されやすいし、活動的になる。

最後に、動機づけについていろいろ調べ、どうしたら失敗回避傾向を弱めることができるか考えてきたが、あくまでも理論にすぎない。早く自分自身が実践し、さらによりより指導法を考えていけるように、研究をすすめていきたい。

下山剛	1985	「学習意欲の見方・導き方」	教育出版
下山剛	1981	「達成動機づけの教育心理学」	金子書房
宮本美沙子	1982	「やる気を育てる」	有斐閣
桜井茂男	1997	「学習意欲の心理学」	誠信書房
Don Dinkmeyer	1985	「子どものやる気」	創元社
Rudolf Dreikurs			